

INTERVIEW

白糠診療所 所長
石堂哲郎先生



新たな医師人生を豊かに楽しむ

聞き手：山田隆司 公益社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長

協会の再研修を受けて、学生時代の思いを再び

山田隆司(聞き手) 今日、青森県下北半島の白糠診療所に石堂哲郎先生を訪問しました。石堂先生は地域医療振興協会の再研修プログラムを受けて地域へ赴任された第1号です。先生をお訪ねするのは先生が着任されて以来なので約7年ぶりになりますが、元気な顔を見て安心しました。今日はここに赴任されるに至った経緯やここでの生活についてお聞きしたいと思います。まずは先生のこれまでの経歴をお話いただけますか。

石堂哲郎 私は、横浜市大を1968年に卒業しました。

そのころはまだインターン制度はなくなっていなかったのですね。それで1年間は今でいうスーパーローテートのように各科をまわったあと、泌尿器科学教室に入りました。数年間は神奈川県内の総合病院の泌尿器科や大学の麻酔科などで研修しましたが、1973年に神奈川県総合リハビリテーションセンターが新しく設立され、そこに泌尿器科もできたので先輩の先生と2人で赴任しました。そこでは泌尿器科の中でも、特殊な、神経が障害されたことによる泌尿器科疾患、すなわち脊髄損傷や二分脊椎、片麻痺や神経

難病の人たちの尿路管理、性機能の治療などを主な仕事としてやっていました。泌尿器科の中でも特殊な分野だったのですが、特殊だということで、国内でも同じような仕事をしている人は多くなかったので、外国も含め、いろいろな人たちと親しくなれて勉強になり、面白くやり甲斐を感じていました。

山田 排尿に関するリハビリのようなことですか。

石堂 そうです。神経の障害により膀胱機能がやられて排尿がうまくいかないと腎機能が悪くなって命を縮めてしまうことになるので、いかにスムーズに排尿させるかというのが主な仕事です。

その病院ですと働いてきて、だんだん年功序列で診療部長になったり、副院長になったりして、そうすると医者を離れた仕事が多くなってきてしまうのですね。

山田 そうですね。マネジメントのほうが多くなりますね。

石堂 はい。何となく馴染まなかったのですね、そういうのに。定年が近くなってきたときにこのままではつまらないような気がしてきて……。実は学生時代、横浜市大には日赤奉仕団というクラブがあって無医地区診療をしていたのですね。2年間ぐらいですが、私もそのお手伝いで山梨県の市川大門から山に入った地域に行きました。夏休みに小学校の体育館を借りて、1週間、診療所を開くのです。そういう経験があったので、歳をとったらああいう仕事をもう一回やってみたいなという気がありました。

それで、泌尿器科の関係で岩室紳也先生と話をする機会があって、協会の存在を知ったのですね。3月31日に神奈川リハビリテーション病院を辞めて、翌日の4月1日から赤羽の東京北社会保険病院に再研修に行きました。東京北の総合診療科に入り、外来や半直をしたり、代診で檜原村診療所、神津島、青ヶ島、白糠などに行つて、いろいろ勉強させてもらいました。内科につ



いては薬の名前すらろくに知らなかったもので、本当に勉強になってやれそうかなという気にもなりました。それでその年の秋に、白糠診療所での診療を経験して、ここならどうかな？と思つて、行ってみたいと山田先生に無理にお願いしたのですよね。

山田 先生、初めは南の島へ行きたいと話していましたよね。こんな北の方でいいのかなと思ひました(笑)。

石堂 初めはそうだったのですが、今思うと、島というのは、すごくエネルギーがいるので、やはり若くないとちょっと無理かなと。

山田 そうかも知れませんがね。

石堂 この診療所をやらせてもらって本当に恵まれたと思うのは、市立奈良病院の中島俊一先生はじめ、代診の先生方をお願いできるので休みが取れるということと、東通村診療所の川原田 恒先生に入院や夜間の対応をお願いできることです。とてもありがたいことだと感謝しています。

山田 専門医として臨床経験のある方で、改めて地域に出ていくために研修をしっかりとってからと言っただけのこと実はあまりないので、初めは再研修自体があまり負担になると厳しいかなという思いもあったのですが、先生はしっかりここに赴任するための準備をしてくれてよかったです。

自然体でかかわれる医療

山田 先生は長年病院の医療に携わってこられて、現在はここに赴任されて、病院と診療所で患者さんへの接し方や患者さんとの付き合いの度合いなど全く違うと思うのですが、どんなふう

に今、それを感じていらっしゃるのでしょうか。

石堂 申し訳ない言い方になるかもしれませんが、こちらでの仕事は楽だと思っています。あまり肩肘張ってよそゆきの顔をしている必要がないというような感じで、自然に無理なくという感じがありますね。だからやっても楽しいし、本当に来てよかったなと思いますね。

山田 たしかに私も両方経験していますが、病院での医療はその場勝負のところがあります。この患者さんはたまたまここでの出会いがあったというだけで、二度と会うことはないかも知れないのですから緊張して臨むことが多いですね。医師と患者といてもどちらも人間なのでお互いの感情、お互いの気持ちがあり、疲れているときもあり、楽しいときもあり、地域ではそれが実は診療の中に活かされているのですよね。自然体でお付き合いできるというのが、私は地域医療の醍醐味だと思っています。

そうすると、日々の診療というのは、比較的おだやかで豊かな感じなのですね。

石堂 そうですね。

山田 往診もされているのですか。

石堂 月に10人前後、訪問診療をしています。

山田 地域の医療というのは、私生活も含めて住民の方とかかわることになるものですが、地域の生活はいかがですか。

石堂 それもこちらのペースにすっかり慣れました。東通村ではこの時期「新そば街道まつり」というのが開催されるのですが、先週も何軒か食べ歩きをしました。自然が豊かで季節季節の変化があるので楽しいですね。私は写真を撮るのも趣味の一つですが、野生の花(トリカブト、ス

カシユリなど)を撮ったり、診療所の裏にキジや青鷺がやって来るのでその写真を撮ったりと楽しんでいます。

山田 われわれ自治医大卒業生は医者になり立ての若い時にこういう環境に赴任することになります。医療の技術や技能を身に着けなければと焦っている時期だからかも知れませんが、先生がこの7年間で感じてこられたような豊かさ、味わいといったものを感じる余裕がなくて、今思うととても残念なことです。人生の中で、価値の大きい時期だったのだなと振り返って感じています。私たちはこれまでへき地医療を担ってきて、「へき地医療はこうあるべきだ。グループでやったほうがいい」などとへき地医療を熱く語ってきましたが、ある程度の経験をされて地元の人たちと上手にお付き合いできる先生のようなスタンスのほうが、逆にうまく馴染めることもあるのではないかと思います。ですからいろいろなキャリアパスを作っているいろいろな人たちが喜んでこういった地域で活躍できる形がつかれるといいかなと思います。

石堂 無理なくですよ。

山田 そういう意味では、ある程度若いうちは救急や病棟管理や、過酷なことでタフに腕を鍛えていき、地域の最前線、患者さんに一番近いところの医療は、むしろ患者さんの人生の深みを読んだりするようなことを楽しめるような世代になってから担ったほうがよいのではないかと思います。

石堂 私自身も、そういうふうには今は思いません。ですから年を重ねた人たちがかわることのできる一つの大きな分野にへき地医療がなってもいいのではないかと思います。

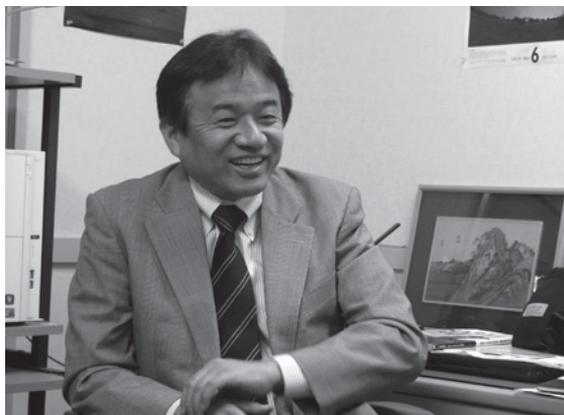
山田 そうですね。でも地域医療では、先生のように専門をお持ちでもそれを発揮する機会がないという状況ですが、先生はストレスに感じたり

することはありませんでしたか。

石堂 自分の専門ができないというより、特に初めのころは心電図がいまひとつ読めないとか、胸の写真をどう読めばいいかというストレスはありましたが、だんだん慣れてきましたし、ここでは東通診療所をお願いできるシステムがあったので、あまり不安はありませんでした。

山田 ソロプラクティスとはいえ、複数でカバーしあったり、あるいは先ほどご指摘いただいた代診など、みんなでサポートすることができていればいいという感じですね。

石堂 これから長寿社会になって、医者も長生きになるでしょうから、そういう人たちが参加できる形ができるとよいと思います。



聞き手：地域医療研究所所長・「月刊地域医学」編集長 山田隆司

田舎を強くしなくては！

山田 今、白糠地区の人口は何人ぐらいですか。

石堂 白糠だけで大体2,000人ぐらい、村の3分の1弱ですね。

山田 在宅でのお看取りもありますか。

石堂 看取りは年に1例ぐらいはありますね。検視も年に1例ぐらいあるのですよ。初めての経験でした。

山田 先生がここで7年やってこられて、地域の人たちに助けられていると感じられることはありますか？

石堂 そうですね、いろいろな食材をいただいたりして、助けられていますよ(笑)。

山田 (笑)食べきれないほどですよ。

ところで、東日本大震災のときは、こちらは大きな影響はなかったのですか。

石堂 被害はありませんでしたが、震災後すぐに青森の沿岸全体に大津波警報、避難指示が出たので、避難所に1晩泊まりました。ここは海に近いですし、すぐそこが川なのでこちらに津波が来たら危ない地域ですね。

震災のことではないのですが、ここに来ていろいろ思うことの一つに、人口過疎、人がどんどん減っていくということ。どうしてそうなるのだろうと思っています。日本はこれから田舎を強くしなければ駄目なのではないかと思うのですよ。田舎を強くするには何が必要なのか、どうすればいいのかというのを考えるのですが、とても答えが出ない。いわゆる補助金というのが本当に田舎のためになっているのかなということも最近感じます。では何をすればいいかという手はないのですが…漫然と思うのは、やはり日本中の第一次産業をもっと大事にする、そういう雰囲気、そういう考え方が大きくなっていくといけないと思います。

山田 本当にそうですよね。一義的に効率よくものをつくるシステム、生活の利便性のよさ、教育の充実など、みんなの価値観が一つの尺度だけに偏っている気がします。

石堂 そうですよ。日本全体が一つの方向に向かっているような気がするのですね。

山田 だから私は、先生が「ここで楽しい、豊かだ」と思われていることがとても重要だと感じますね。先生のおっしゃる価値観の偏りは医療においても同じだと思うのです。みんなが大きな病院で先端医療に従事すること、あるいはそういった医療を受けることだけが価値が高いと思いついて入っている。地域医療の価値、地域の文化、暮らし、人生の豊かさみたいなもの、そんな幅広い価値観を見失っている気がします。自然の中で生活をしたり、一次産業を担ったりとバランスを保って生活することができるような基盤をつくるのが大事だと思います。

石堂 日本全体がそうなるといいように思います。

山田 ヨーロッパ、例えばイギリスやスコットランドなどは田舎の祭があったり、その土地だけのお酒があったり、教会があったり、慣習が古くてもそれにこだわりがあったり、それをみんなで一所懸命護っている。

石堂 護って、利用している。田舎が楽しそうです

よね。

山田 田舎で医療を担っていると、土地の人に救われたり、そこでの豊かさを感じて充足されるのですが、本来は土地自体が元気であると、もっと楽しいですよ。

石堂 そうですね。ここに来て7年経ちますが、だんだん人口は減っていき寂しさを感じています。これをなんとかしたいなと思いますね。

山田 こういう過疎のところの人口が減り続けて、人が住まなくなって、田畑が荒れて、漁港が衰退して…都市部の第二次産業、第三次産業だけが発展して…そういう先に本当に豊かさがあるのかなという不安はありますよね。

石堂 いろいろな問題もあるのですが、高校を出て仕事がないという人も増えていますよね。でも決して仕事がないわけではない。第一次産業は大変な仕事ですが、価値あるものと認めるような雰囲気になれば、みんなそういった仕事をしようと思うのです。

一つの地域に長くかかわる

山田 先生のように、また私自身もそうですが、こういう地域で楽しんで自分なりに生活できたり、仲間がいたりということができればいいですよ。

協会の中でキャリアを変えられる自由度を設ける。でも一番大事なことは、医療というものは本当に公共財なので、みんなで分担する。いろいろな選択肢をつくって、キャリアの中で自分がうまく選択できるようにできたらいいと思うのです。

石堂 協会の中でいろいろな交流がもっともってできるといいと思うのですけどね。

山田 先生に対しても本当はわれわれがもっとサポートしなくてはいけないのですが、先生に続くような人たちがこれからも増えるといいと思

います。先生はさらにこんなことがあったらいいということはあるですか？

石堂 これからもっと歳をとったときに、ここで例えば3ヵ月とか半年やって、もうそんなに体力もないでしょうから、あとはどこかでのんびりするということもできたらいいかなと思います。

山田 本当にそう思いますね。一つの土地に7年、8年とかかわることができる、基本的には自分の生きている間はその土地との縁というのは、ありがたいことになくならないものです。だから他の医者がそこを担当することになったとしても、3ヵ月は手伝いますということができれば、住民にとってはありがたいのです。だから一つの地域を1人の人ががんじがらめで365日数

年間護って、その次の世代がまた数年間護ってというよりは、1回護った人たちが継続的にグループでかかわって、生涯、住民たちとの付き合いを続けるという形をうまくとる。土地との縁を離さないということと、医者キャリアがうまくつながっていいかなと思います。

石堂 私もそう思います。

山田 今日は先生がここで楽しんで過ごしていらっしゃるお話を聞いてよかったです。最後に、現在、こういったへき地で頑張っている若い先生

たちに、メッセージをお願いします。

石堂 自分の若いときのことを思い出してみても、どんな仕事でも初めはつらかったり、うまくいかないことはいっぱいあると思うのですが、それは生涯続くわけでもないし、今つらければつらいほど、先にはいいことがあると思うので諦めないでほしい。今の環境を逆に楽しむ気持ちを持って、頑張ってもらいたいと思います。将来はきっといいことがあるはずです。

山田 石堂先生、今日はありがとうございました。

